Osaka University Knowledge Archive

Title	大阪大学の新たな学習空間「グローバル・コモンズ」: その整備と教育実践
Author(s)	久保山, 健
Citation	大阪大学高等教育研究. 2014, 2, p. 61-67
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/28107
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

大阪大学高等教育研究　2（2013），61−67

【教育実践レポート】

大阪大学の新たな学習空間「グローバル・コモンズ」：その整備と教育実践

久保山　健

A New Collaborative Learning Space “Global Commons” in Osaka University Library
Preparation, launching and educational activities

Takeshi KUBOYAMA

This paper describes new collaborative learning space known as “Global Commons” in Osaka University Library.
Osaka University has been working on improving collaborative learning space on campuses. Osaka University launched the “Global Commons” in the Main Library as new collaborative learning area during November 2012. It aims at enhancing “transcultural communicability” as one of the goals of ‘philosophy on education’ in Osaka University, and implementation of multiple style of learning. Upon preparation of the opening; interviews, questionnaire as well as survey among the students were conducted to reflect learning needs. And now, the “Global Commons” is being used not only for collaborative learning but also workshops, classes and seminars by students and faculty members.
This paper, firstly reviews its preparation as well as facilities, and then describes about the educational activities held at the “Global Commons”.

Keywords : Global Commons, Learning Commons , Educational activities, University library, Osaka University

1. はじめに

大阪大学は，2012年11月，豊中地区の総合図書館に新たな共同学習スペース「グローバル・コモンズ」を開設した．これは，2009年度から始まるラーニング・コモンズの機能を強化・拡充するものである．コンセプトは，多言語・多文化学習への支援である．

開設の準備に当たっては，利用動向調査やインタビュー，アンケートを行い，教員や学生のニーズをなるべく反映させた施設となるよう心がけた．開設後は，学習場所として非常に活用されている．

附属図書館主催の講習会の場所としても使用するほか，授業の場所として活用される例も見られるようになってきた．意外だったのは，学生による主体的な活動としてのイベント利用が，グローバル・コモンズ開設以降，急増したことである．その中から「グローバル」に関係するイベントも見られるようになってきた．

本稿では，グローバル・コモンズの整備について，コンセプトやインタビュー等の事前調査，ならびに設備について紹介する．そして，そこで行われている講習会・授業・イベント等を紹介する．

なお，グローバル・コモンズの整備は同僚と分担して

所　属：附属図書館 利用支援課
Affiliation : Librarian, Specialist User Division, Main Library, Osaka University, JAPAN
連絡先：kuboyama@library.osaka-u.ac.jp

行った．筆者が主に担当したのは，什器の選定，インタビュー，広報，一部の講習会，そして，授業やイベント利用の窓口である．これらについても，同僚と分担ないし協力して取り組んだ．グローバル・コモンズの整備の全てを筆者が行ったものではないことはあらかじめお断りしておく．

2. グローバル・コモンズの整備

ここではグローバル・コモンズの整備について，事前のニーズ調査や設備などを紹介する．

(1) ラーニング・コモンズ設置からの経緯

大阪大学では，2009年4月と6月，附属図書館の理工学図書館（吹田地区）と総合図書館（豊中地区）にラーニング・コモンズを設置した．それ以降，授業実践や各種の講習会など，学修支援の取組を続けている[(1)(2)(3)(4)(5)(6)]．

2009年11月には，豊中地区の全学教育推進機構総合棟Ⅰに「ステューデント・コモンズ」が設置された．このスペースは，「学生の主体的な学びの場」であり，「学生相互の交流や，学生と教職員とのコミュニケーションを活性化させるスペース」とされている[(7)]．

2012年4月には，箕面地区の外国学図書館にラーニング・コモンズ（愛称「るくす」）が設置された．

そして，2013年11月，豊中地区の総合図書館にグローバル・コモンズが設置された．そのエリア面積は，545㎡である．

また，グローバル・コモンズのためのスペースは増築ではなく，既存スペースを有効活用することによって生み出すことができた．整備前の当該エリアには一部の分野の製本雑誌がそれ以外の雑誌とは別に配置されていた．多くの雑誌は別のフロアで電動集密書架に配置されているが，その書架の本数を増やすことによって，当該エリアの雑誌を収容することとした．併せて，分野によって分かれていた雑誌の配置場所も集約することができた（計画時は，学術雑誌の学際的利用と呼んでいた）．これにより，建物を拡充することなく，既存のスペースを活用することによって，新しい学習空間を生み出すことができた．

(2) コンセプト

グローバル・コモンズは，多言語・多文化学習のための共同学習スペースである．設置のコンセプトとしては，(1) 本学の教育理念の1つである「国際性」のサポート，(2) 授業内外での学びに対応する「学びのスタイルの多様化」の実現があげられた．そして，既存のラーニング・コモンズの機能を強化・拡充していくという役割が与えられた．

「国際性」のサポートとは，留学生同士，または日本人学生と留学生の交流などを指す．「学びのスタイルの多様化」としては，多様なテーブルやホワイトボードによる自由な発想で自主学習を進められる空間，そして，24時間開館があげられる．

(3) 事前のニーズ調査

学生ならびに教員のニーズを反映させるべく，いくつかの調査を行った．これらによって，什器や勉強場所の「好みの多様性」を実感することができた．特に什器選定に当たっては「自分目線の排除」を心がけることにつながった．もちろん設置者側にも各自の好みもあり，自分目線の排除は簡単ではないが，それを助けたのがこれらの事前調査だった．事前調査の中でもインタビューを何度か行うことによって，ユーザによって「好みの多様さ」があることに改めて気付かされた．そして，学生ならびに教員のニーズを汲み取ることができたと考えている．

(a) 利用人数調査，およびインタビュー調査

まず，2012年4月16日から20日に，総合図書館ラーニング・コモンズで利用人数調査，およびインタビュー調査を担当のスタッフで分担して行った．

利用人数調査は，ラーニング・コモンズ内を7つのエリアに分け，各エリアで「何人グループが何組いるか」「どのような行動をしているか」を調査した．各日，11時・15時・18時・20時の4回，調査を実施した．

インタビュー調査は，同じ期間の11時と15時に実施した．声をかけられそうなユーザを適宜選択し，その場でインタビューのお願いをした．複数人利用，単独利用，いずれも対象とした．利用の目的，滞在時間，ラーニング・コモンズの良い点・改善すべき点，什器の使い勝手など，口頭で質問した．各回当たり2－3組，インタビューした．

その結果，利用人数調査では，(1) 少人数での利用が多かった（グループ単位で計数すると，3人グループまでが9割を越えた），(2) 複数人利用が単独利用を上回ったのがフリーゾーンと呼ばれるエリア2ヶ所のみ，(3) 比較的多人数の利用を想定していたコラボレーションゾーンで単独利用が7割を上回った，(4) 15時と18時の方が複数人利用の割合が多い，(5) 多くのグループが

パソコンを使っていたことが見られた.

上記の結果について補足する.（1）の少人数の利用については，前期の最初の時期だったため，少人数の利用がやや多めに出たことも考えられる.（2）と（3）のエリアによる違いについては，コラボレーションゾーンに置かれている据置パソコンを単独利用するユーザに対する配慮からか，複数人利用がしにくくなり，スペースを有効活用できていないことが推測された.

また，インタビュー調査では，良い点として,「話せること」,「パソコンがあること」は想定していたが,「本が近い．書庫が近い」という回答が複数のユーザから聞かれたのは意外だった．什器については以下のような意見が聞かれた.（1）机の形の好みは分かれるが，いろんな形が混在している方がよい,（2）ソファに対する一定のニーズ（主にはリラックス目的だが，単独学習，少人数での学習にも活用),（3）一人当たりのスペースを大きくしてほしい（ノートパソコンとA4レジュメ程度の広さ),（4）同一グループ内の対人距離は近く，他グループとの距離は遠くなどである.

（b）アンケート調査

2012年5月14日から25日にかけて，Webサイトに設置した入力フォームと，ラーニング・コモンズに設置したアンケート用紙により実施した. 内容は, ラーニング・コモンズの利用状況，呼称，新しい空間への要望などである．回答数は70名（Web44名，用紙26名）であった.

その結果,（1）利用頻度は週2－3回が最多（22名),2位は週1回未満が21名,（2）平均利用時間は1時間半程度が最多（23名)，2位は1時間程度が13名,（3）呼称は「ラーニング・コモンズ」「ラーコモ」が最多（各13名）といった結果が得られた.

その他，ラーニング・コモンズの魅力として，話せる点が最多（38名）だった他, 気軽さをあげた回答が目立った．この調査では,「本が近い．書庫が近い」という回答はあまり見られなかった.

足りないものや欠点として，広さや座席数回答が最多（24名）で，他にPCやコンセント，ホワイトボードの数の少なさをあげる回答が見られた.

新しい空間への期待としては，特に集中した回答はなかったが,「グローバル」な交流や支援を求めるもの，学習の雰囲気に関するものといった回答があった.

（c）グループインタビュー

2012年5月1日，24日の計2回，それぞれ約1時間おこなった．参加者は，5月1日が12名（学生6名，教員6名)，24日が8名（学生6名，教員2名）であった．内容は，職員から新しい学習空間の構想を説明し，什器や設備，エリアのカラーデザイン，利用形態などについて，意見を聞き取った.

具体的には，机やイスの具体的な形態，ホワイトボードやパソコン接続のディスプレイなどの必要性，エリアごとの想定する使い方など多岐に渡った．詳細は省略するが，多くの意見を聞くことができた.

写真１　グループインタビューの様子

(4) 設置した什器や設備

テーブルは1人用のものから，3-4名用の比較的小型なものを数種類設置した．組み合わせによってより多い人数での作業も可能になることを期待した.

座席はテーブルに対してやや多めに114席設置した．イスを多めにしたのは，既存のラーニング・コモンズで1ヶ所のテーブルに比較的多い人数が集まる状況が見られたからである．他に，移動可能な比較的小型のホワイトボードも設置した．但し，繁忙期等は会議用の長机を臨時追加し，2013年7月の試験期には一時180脚以上の座席を用意した.

また，当該エリアは主な入口から既存のラーニング・コモンズよりもさらに奥にあるため，準備段階ではユーザが足を運んでくれるかという心配があった．そのため，什器の選定に当たっては，事前のニーズ調査や使いやすさなどを最大限考慮した．それと同時に，通り抜けできない独立エリアであり，24時間開館も計画されていたため，セキュリティに配慮する必要もあった．特にホワイトボードの高さと数の面で，視界の確保を考慮した.

電子黒板やテーブル型タッチディスプレイ，海外新聞閲覧機器なども設置した．開設準備の段階では，筆者ら提供側もほとんど使用経験がなく，メーカのショールーム等で必死に使用感をつかもうとしていたのが事実である．設置後，ユーザが活用していることは見られるが,

提供側のノウハウや情報リテラシーも必要となる．また，今後の高校教育や社会の変化によって，それらのIT機器がより一般的になることも予想される．提供側の知識やスキルの積み重ねもより必要となるだろう．

その他には，天井吊りプロジェクタ，マイク設備も設置した．

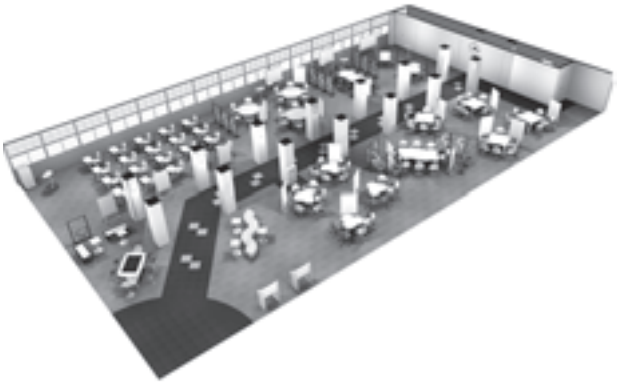

図１　グローバル・コモンズ　俯瞰図

(5) エリア名称

当該エリアがユーザに認知されるために名称（呼びやすさ）も重要だと考えた．すでに同じキャンパス内に○○コモンズが2つ存在していたため，1つだけ愛称を付けるよりも，同じように○○コモンズとすべきと考えた．併せて，略称の作りやすさ，大阪大学の教育目標との関連性などを考慮し，「グローバル・コモンズ（Global Commons）」とした[8]．

その後，ロゴの制作やイメージカラーの設定，ロゴの基本コンセプトや込められた思いの設定を行った．これらの結果，学内での認知度向上に一定の役割を果たしたと推測している．

GLOBAL COMMONS
OSAKA UNIVERSITY LIBRARY

図２　ロゴ

(6) 設置者の目線とユーザの目線

特に什器選定に当たって，自分の好みを排除することを心がけたのは前述のとおりだが，その一方で悩んだのは共同学習スペースでの1人学習をどう考えるかである．設置目的を尊重すれば，1人学習は別のエリアに誘導したいと考えられる．しかし，既存のラーニング・コモンズで一定数の1人利用があるのも観察されていた．

検討の途中では，自然に1人利用が集まる「お一人さま吸収スペース」を設けることによって，共同学習とのバランスを取ることも考えた．しかし，結果的には，入り口付近のざわつきに対する緩衝地帯としてソファを4脚置いたことを除いて，共同学習を念頭に什器を選定した．

共同学習スペースにおける1人利用を想定するかしないかの判断は分かれるだろうが，グローバル・コモンズ計画の段階では，共同学習を重視するという設置者の目線が相対的に強かったのではないかと考えている．共同学習という設置目的や，静かな場所を求めるユーザにも当然配慮すべきだが，実際のところ，小型テーブルを窓に向けて1人利用するユーザ，長机を窓に向けて臨時設置していた時には，そこを好んで1人利用するユーザが存在した．

設置者側としては，1人学習用には静かな（階上の）別フロアを用意している，と説明する場面があるのは事実である．一方で，多少ざわざわした空間が好きという理由や，入り口から近いという理由など，空間の選択は，まさに「好みの多様さ」を設置後も実感することになった．中には「ここで勉強していると友達も来るから」というユーザもいた．グループ学習を誘発するエリア設計を心がけつつ，ユーザの行動や学内全体の学習環境まで考慮すべきと思われた．

3. グローバル・コモンズでの教育実践

次に，グローバル・コモンズでの教育実践を紹介する．

(1) 図書館および全学教育推進機構主催の講習会

既存の講習会も積極的にグローバル・コモンズで実施した．最初は場所の広報という意味合いもあったが，徐々にラーニング・コモンズの設備や環境の違いを考慮して，場所を選択するようになった．また，グローバル・コモンズの多様な什器や設備を積極的に使うことにより，教える側のスキル向上を狙った．

当該エリアで実施したのは「論文の書き方＆文献の読

み方　プチ・ゼミナール」,「プレゼン入門：話す基本技術講習」そして「グローバル・コモンズ カフェ」である.

1つ目の「論文の書き方＆文献の読み方　プチ・ゼミナール」は，教員と図書館職員が講師を担当し，協働して作り上げている．これは卒業論文に向けた全4回の講習会で，書くだけでなく読み方の解説，論文企画書の作成という実習を含むものである．約8名を定員に開催している．参加人数に応じて適宜机の配置を変更し，会場作りを柔軟に行った.

2つ目の「プレゼン入門：話す基本技術講習」は，図書館職員（筆者）が企画および講師全般を担当している．ロジカルに話すための基本的なスキルを身に付けることを目標としている．当初は全2回で開催していたが，途中から発展編という名前で司会の方法やブレインストーミングも取り上げている．直近の2013年9月では，基本編の2回に加え，発展編も2回に分け，希望に応じて全4回となるように構成した.

グローバル・コモンズで行う際は，資料の投影に電子黒板を活用した．卓上のプロジェクタが人の動きに制約を与えることがないため，講師と受講者の距離に自由度が広がり，受講者の座席を柔軟に変えることができる．それにより，受講者同士のコミュニケーションを活発にする効果もあったと考えている.

これら2つの講習会の内容については，文末の文献［1］［3］［4］［5］［6］を参照されたい.

3つ目の「グローバル・コモンズ カフェ」はグローバル・コモンズ開設に伴って始めたものである．図書館ティーチング・アシスタント（TA）が語学や異文化紹介などの各種イベントを行うことにより，学生の「国際性」を高めることを期待している.

2013年1月には「初めての中国語」と題して開催した．中国語の初学者を想定し，学習のきっかけやヒントをつかんでもらうことを期待した．講師は中国からの留学生TAが担当し，「第一弾　発音にチャレンジしてみよう！」,「第二弾　簡単に話せるには？」というテーマで2回に分けて実施した．参加者は16名であった.

2013年6月にも2回，開催した．1つは「What are Chinese Businesses up to in sub-Saharan Africa（アフリカにおける中国の投資と貿易）」とのテーマで，図書館TAの研究分野をいかし，国際情勢を紹介し，ディスカッションするものとした．もう1つは，「いろいろな国の視点でニュースを読む日」とのテーマで，ある事柄が国によって新聞の取り上げ方がどのように違うのかを解説した．後者については，大学が契約している海外新聞データベースと，グローバル・コモンズに設置しているテーブル型タッチディスプレイを活用し，それらの利用促進も期待した.

現在のところ，このグローバル・コモンズ カフェのみが設置コンセプトの1つ「国際性のサポート」に直接的なつながりのあるものだが，既存の人員でやりくりしているため，なかなか充実できないのが課題である．一方で，次に述べる授業やイベントでの利用に「国際性」に関するものが現れており，そのコンセプトを補完する結果となっているとも言える.

写真２　グローバル・コモンズ カフェの様子

(2) 授業の場所としての活用

グローバル・コモンズが授業の場として活用されたのは，2013年5月が最初であった．留学生が多くを占める科目のグループ討議の場として，1名の教員から前期中に計4回ご利用いただいた．利用条件として，留学生が対象の科目に限っているわけではないが，周囲の学生に対して結果的にグローバルな空気感が演出できたと考えている.

なお，この授業利用のきっかけは，筆者が私的に学生向けの留学オリエンテーションを見学したことである．その場で授業担当の教員に挨拶することがあり，それが縁で授業利用につながった．普段の広報ではなかなか存在が知られない一方，ちょっとしたことで教員のニーズをつかめたことは興味深い.

これ以外には，11月上旬までに，2件の単発利用があった．用途としては，文献を使ったグループワークや図書館の使い方の解説である．多い件数とは言えないが，既存のラーニング・コモンズと合わせて多様な環境を用意できたと考えている.

今後は，学内の教室環境に配慮しつつ，グループ討議

の場や，図書館の施設・資料の活用につながるような授業利用につなげていきたい．

写真３　授業の様子

(3) 学生・教職員による各種イベント利用

全く予期していなかったのが学生・教職員による各種イベントでの利用の急増である．ラーニング・コモンズでもイベント利用が可能なルール設定をしていたが，特別なものを除けば，イベント利用はほとんどゼロであった．グローバル・コモンズ開設の機会にイベント利用について特に広報を強化したわけでもなく，エリア開設を知らせるポスターに小さくその旨を記した程度である．しかし，開設直後から問い合わせが相次いだ．

件数としては，2013年11月上旬までの1年間で，33回の利用があった．1ヶ月平均で2.75回である．これまでほぼゼロだったことを考えると，急増と言ってよいだろう．教員主催のものもあるが，多くが学生主催のものであった．予期していなかったとはいえ，学生の自主的な活動を支援することができたと理解している．

利用する際の基準は以下のとおりである．教職員主催の研修やセミナーの場合は原則的に利用が認められる．学生主催の場合は，(1) 主催者が本学構成員であること，(2) 学内に公開されるイベントであること，(3) 教職員が責任者となることが条件となる．その他，内容や日時，参加予定人数を確認しながら，利用を認めるか判断する．時には，学内の他の施設を紹介することもある．

学生の場合の利用基準について少し補足する．1つ目の「主催者が本学構成員」というのは，ある意味当然であるが，「本学の学生が多くを占める団体」が主催という場合は，判断に迷うこともあった．その際は，WebサイトやSNSでの団体紹介や，教員の推薦を参考にした．筆者としては，学生の多様な活動の一端を知るきっかけともなった．2つ目の「学内に公開」というのは，当該エリアが原則的に予約なしで自由に使える場所ということによる．自分達のグループだけで利用する際に予約はできないということであり，逆に予約するためには，公開イベントでないと矛盾が生じることとなる．また，内容について，特にグローバルに関係するかは問わないこととした．広く活用されることを優先したからである．しかし，後述するが，その中から英語の学習会や討論会が出てくるようになった．

学生主催イベントの内容は多岐に渡るが，共通するのは，共に学習することや，自分達の考えを共有することによって，学生自身の成長につながることではないだろうか．以下にいくつかの具体例を紹介する．

(a) 阪大SpeakOut予選会（2013年2月）

本学の1回生が自分の思いや夢を語るイベント「阪大SpeakOut」のプレゼンター予選会．主催も1回生であった．本戦には10名のプレゼンターが登壇し，100名ほどを集める大きなイベントとなった．なお，筆者は予選会の審査員の1名として招かれ，学生達の思いに触れることができた．

(b) ビブリオバトル（開催は随時）[9]

本学公認学生団体「サイエンスルー」が定期的に開催する，複数の登壇者が本を紹介するビブリオバトル．単に本を紹介するだけでなく，本を通して人を知るという側面もある．終了後に参加者同士で意見交換の輪ができることも珍しくない．

(c) 日蘭学生会議　春期英語会（2013年3－4月）[10]

グローニンゲン大学（University of Groningen，オランダ）への短期留学を経験した本学学生が母体となって設立された団体による，英語での討論やプレゼンテーション．

(d) アゼルバイジャン外交大学（Azerbaijan Diplomatic Academy，アゼルバイジャン）の留学説明会（2013年10月）

同大学の国際プログラム長による大学概要や進路，奨学金などについての留学説明会．予想を超える約15名もの参加者を集めた．筆者としても予想外の利用目的に最初は少しの不安があったのは事実であるが，施設の新しい活用法を見た思いがした．

こういったイベントが多く開催された背景はどのようなものであろうか．推測の域を出ないが，1）グローバル・コモンズという空間が何かイベントをしてもよさそうな雰囲気を出していたことと，2）学生達の潜在的なニーズがあったことだと考えている．特に，ラーニング・

コモンズのみだった時にイベント利用の問い合わせがほぼなかったことを考慮すると，グローバル・コモンズの雰囲気によるところが大きいのかもしれない．提供側としては，施設の使い手・サービスの受け手がいて，初めて場所の存在価値が吹き込まれることを実感した．

若干の反省としては，受け身になりがちな提供側の姿勢だろうか．中には積極的に誘致したイベントもあるが，申請式という制度のせいか，どうしても受け身になってしまうところもある．今後は，学生に積極的に関わって，学生達の自主的な活動を共に育てる姿勢をもう少し強くした方がよいかもしれない．

4. まとめ

本稿では，2009年のラーニング・コモンズ設置から，2012年のグローバル・コモンズ開設への発展について，整備に当たって取り組んだこと，そして，その場での実践について述べてきた．

ここで，本論で触れなかった24時間開館について，簡単に補足しておく．24時間開館は，試験前の期間，平日のみ深夜から翌朝まで，グローバル・コモンズに限って行った．期間は，2013年1月21日～2月18日，及び7月4日～8月1日である．最も多い時で，2月には160人以上，7月には180人以上の滞在者を観測した．非常に盛況とプラス評価もできるが，一方で人が多すぎて快適な学習空間を提供できていなかったマイナス面もある．コストやニーズのバランスを考慮していく必要があるだろう．

以上，「国際性のサポート」や「学びのスタイルの多様化」をコンセプトとしたグローバル・コモンズの整備と実践について述べてきた．今後も，学内の関係部署とも協力しつつ，各コモンズの機能強化・拡充を通じて，学修環境の充実に取り組んでいきたい．

受付2013.11.22／受理2014.01.29

注釈

(1) 堀一成．附属図書館ラーニング・コモンズを利用した教育実践の試み．大阪大学大学教育実践センター紀要，7. 2011.3，p.81-84

(2) 上原恵美．ラーニング・コモンズにおける教員やTAとのコラボレーション：大阪大学附属図書館の事例．これからの図書館を考える－琉球大学附属図書館ワークショップ. 2011.2. http://ir.lib.u-ryukyu.ac.jp/handle/123456789/18848［accessed 2013.10.18］

(3) 上原恵美，赤井規晃，堀一成．ラーニング・コモンズ：そこで何をするのか,何がやれるのか．図書館界，63（3）. 2011. 9, p.254-259

(4) 赤井規晃．大学図書館とライティング教育支援．カレントアウェアネス，310. 2011. 12, p.2-4

(5) 堀一成．附属図書館ラーニング・コモンズを利用した大阪大学における学修支援の取り組み．図書館雑誌，106（11）. 2012.11. p.765-767

(6) 久保山健．図書館スタッフによる学習支援の実践：「プレゼン入門　話す基本技術」．大阪大学高等教育研究，1．2013, p.77-83

(7) 大阪大学．ラーニング・コモンズ，グローバル・コモンズとステューデント・コモンズ．http://www.osaka-u.ac.jp/ja/oumode/education_env/communication_space［accessed 2013.10.18］

(8) 大阪大学附属図書館．総合図書館グローバル・コモンズ．http://www.library.osaka-u.ac.jp/sougou/global_commons.php［accessed 2013.10.21］

基本コンセプト：

「多言語多文化理解のための『つながりと創造』」

ロゴに込めた思い：

「複数の丸の連接は，異なる言語・文化を背景に持つ個人やコミュニティのつながりを表現しています．

最上部の独立した丸は，そのつながりから新しい価値や多様なアイデアが創造される様子を表現する一方，個人やあるコミュニティが別のコミュニティとつながろうとしている姿も表現しています．そして，それらの丸の連接でグローバルの頭文字である“G”を形取っています．

ロゴの明るいグリーンは，つながりと創造を促進する空間の“活発さ”“明るさ”を表現しています．

このように，このロゴには，グローバル・コモンズが多言語多文化理解のための『つながりと創造』が生まれる活発で明るい場になる，という思いを込めています．」

(9) Scienthrough．ビブリオバトル．http://scienthrough.qee.jp/2009/category/report/bibliobattle/［accessed 2013.11.10］

(10) 日蘭学生会議．2013春期英語会，参加者募集！（終了）. http://jnsc2010.wordpress.com/2013/02/27/2013%E6%98%A5%E6%9C%9F%E8%8B%B1%E8%AA%9E%E4%BC%9A/［accessed 2013.11.10］